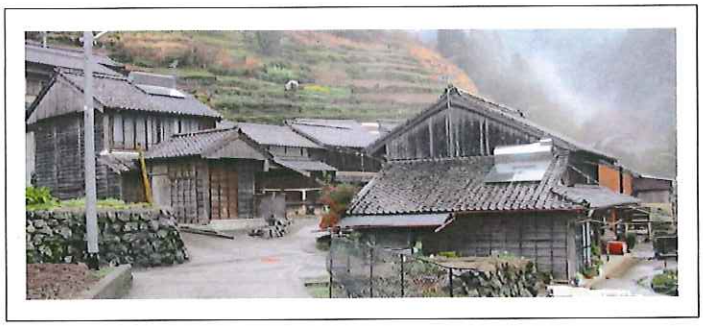
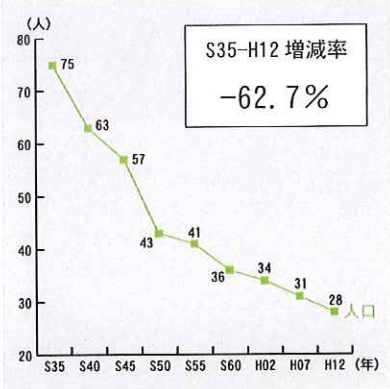
清　助　－seisuke－





年次	総戸数	農家数	専業農家数	第１種兼業農家数	第２種兼業農家数	非農家数	経営耕地面積
S45 年	26	26	10	4	12	0	1,510
S50 年	－	22	4	9	9	0	1,424
S55 年	21	21	10	8	3	0	1,190
S60 年	－	21	11	4	6	0	1,998
H02 年	21	21	12	7	2	0	1,726
H07 年	－	15	8	2	5	0	1,444
H12 年	21	16	－	－	－	5	1,020

（資料：農業集落カード）

集落の概要

清助は、町役場から北西、道路距離で約 12.7ｋｍの位置にあり、現在は 9 世帯が集まって暮らす小さな集落です。

集落の平成 12 年現在の人口は 28 人で、若年比率 7.1%、生産年齢比率 50.0%、高齢化率 42.9%と少子高齢化が進展しています。

清助は、隣の日ノ浦がショウガの出づくりを中心に農業を進めてきたのに対し、林業に特化してきたため、農業は自給程度の規模しかしていませんでした。林業が外材の影響等で不況に陥ったため、現在では年金を主な収入源として暮らす高齢者世帯が半分以上を占めている状態です。15 年程前までは、農閑期（約 3 ヶ月間）に日雇いの土木作業の仕事が集落周辺でもありましたが、それ以降はそのような林業以外の収入源となる仕事もなくなりました。また、農業への転換をしようにも、植林で埋め尽くされた山に

は餌が無くなったため、イノシシが集落周辺まで降りてきており、目の届く人家周辺以外ではイノシシによる獣害で農地を広げることができませんでした。また、林業が盛んな時代に農業に対する認識が甘く、集落を流れる谷川の水の水利権を主張しなかったことが、後の農業衰退につながったという見方も集落内にはあります。

現在、集落に住んでいて仕事を持っている 20～40 代の人は、そのほとんどが越知町内の建設会社で働いており、集落内で農業や林業をしながら生計を立てているわけではないので、同居している親が亡くなるのをきっかけに出ていく場合が多くなっています。

地域活動について見てみると、集落規模が小さいため、住民のまとまりは良いものの、集落内で集まって話し合いをしたり、集落で何か新しいことに取り組むような姿勢はほとんど見られません。これは、住民の気質によるものかも知れませんが、高齢化が進み、特に産業が集落内にあるわけでもないので、半分あきらめのムードが漂っているという見方もできます。

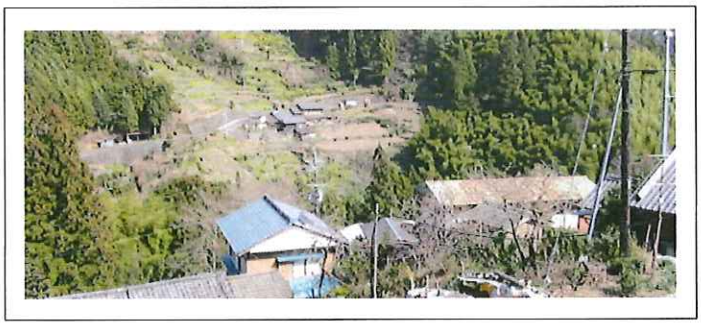
特徴的な取り組み

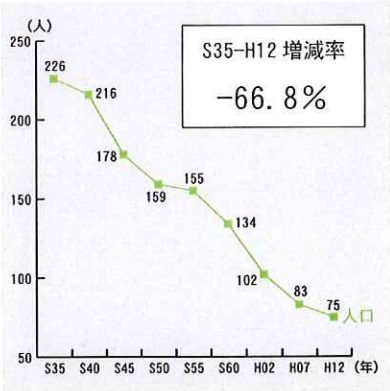
特にありません。

集落の今後･･･

昔は林業、農業、土木･･･と、職業の選択が可能であったのが、林業に特化したため、農業と土木がおざなりになり、林業の衰退と共に集落も過疎化が進んでいったことが考えられます。また、林業にしても、木を育てて売ることよりも、補助金を目当てとした植林を精力的に進めた時代があったため、山林の荒廃が一層進み、イノシシの獣害がひどくなって農業への産業転換が行えなかったことが伺えます。よって、今後は集落内で新たな雇用・就業の場を確保することは非常に困難であり、自然減によって徐々に集落の人口は減っていくことが安易に予想されます。

桑　藪　－kuyabu－





年次	総戸数	農家数	専業農家数	第１種兼業農家数	第２種兼業農家数	非農家数	経営耕地面積
S45 年	47	47	8	16	23	0	2,170
S50 年	－	42	9	7	26	0	1,703
S55 年	46	39	10	11	18	7	1,410
S60 年	－	36	14	7	15	0	1,185
H02 年	41	28	13	5	10	13	867
H07 年	－	17	9	2	6	0	786
H12 年	35	14	－	－	－	21	478

（資料：農業集落カード）

集落の概要

桑藪は、町役場から北北西、道路距離で約 11.6ｋｍの位置にあり、地理的に行き止まりの集落（この集落から奥に集落はなく、車が入れる道もここまで）となっています。小学校や商店、郵便局のある集落までは、谷沿いの道を約 5.3ｋｍ下る必要があり、生活の利便性はあまり良くありません。

集落の平成 12 年現在の人口は 75 人で、若年比率 0.0%、生産年齢比率 48.0%、高齢化率 52.0%と高齢化が非常に進んでいる状態です。

桑藪は、昔は養蚕とミツマタ、林業が盛んな集落でしたが、林業の衰退と共に公共土木を頼りとした建設業と小規模の農業に産業が移り変わってきました。就業状態を見てみると、40～50 代の人たちについては建設業、それ以上の高齢者は農業･･･といった構造になっています。農業についてはネギとミシマサイコの栽培を行っている専業農家が

若干名いるものの、補助金を目当てとした密植によって山に餌のなくなったイノシシが畑に降りてくるため、今以上耕地面積を増やすことは難しい状況となっています。

現在、年金生活者を除けば建設業によって生計を立てている人が多い中、公共事業費削減による公共土木減少が大きなダメージとなっており、生計を立てるための新たな産業が求められています。農業が前述したように、イノシシによる獣害でこれ以上農地を広げることができない中、林業政策による水源涵養林として雑木林等を管理していくことに今後の活路を見つけようとする動きもありますが、それだけで生計を立てることは厳しいと考えます。

現在集落に住んでいる人の多くが、学歴の関係で、集落外に出ても、集落に残ってもホワイトカラーの職種は少なく、結局は建設関係の職業に就くので、現在集落に住んでいるというケースが多いようです(都会にいても、田舎にいても仕事の内容が同じなら、気心の知れた地元が暮らしやすく、経済的にも余裕があるという面もあります)。また、集落には長男が親の面倒を見るのが当たり前という意識が一定広まっていることから、現在集落に住んでいる人の中で「本当は出ていきたかったが、親や仕事の関係で集落から出ることができずに住んでいる」という人は多いようです。

特徴的な取り組み

特にありません。

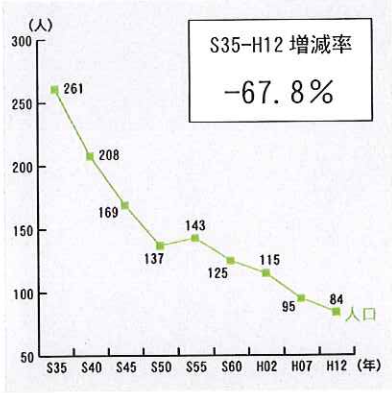
集落の今後・・・

これまで林業→土木という産業の転換をしてきた中で、両者とも公共事業に依存しすぎてきたことが現在の衰退を招いていると考えます。獣害や高齢化により、今後農業へ移行していくこともままならず、先行きは非常に厳しい状況です。また、集落の 40～50 代の男性で約 6 割ほどが未婚者であることも現在の少子化に大きく影響しています。

今後は、年金生活者については年金＋小規模の農業で食べていくこともできるでしょ

うが、その他の人については土木依存や林業への安易な期待のみでは生計を立てていくことは困難と思われ、集落の人口は確実に減っていくものと考えます。

谷ノ内 －taninouchi－



年次	総戸数	農家数	専業農家数	第１種兼業農家数	第２種兼業農家数	非農家数	経営耕地面積
S45 年	45	44	5	12	27	1	2, 530
S50 年	－	39	4	12	23	0	2, 153
S55 年	46	36	5	4	27	10	1, 528
S60 年	－	28	7	9	12	0	1, 678
H02 年	40	23	3	7	13	17	1, 387
H07 年	－	19	7	3	9	0	1, 188
H12 年	38	14	－	－	－	24	617

（資料：農業集落カード）

集落の概要

谷ノ内集落は、町役場の北、道路距離で約 11.0ｋｍの高台に位置し、見晴らし、日当たりともによい集落です。しかしながら、地理的な行き止まり集落（この集落から奥に集落はなく、車の入れる道もここまで）であり、小学校や商店、郵便局のある片岡集落まで出るにも、谷沿いの道を約 3.1ｋｍ下らなくてはならならず生活の利便性は決して良いとはいえません。

平成 12 年現在の人口は 84 人で、人口構成は、若年比率 2.4%、生産年齢比率 47.6%、高齢化比率 50.0%と、少子高齢化が進行し、限界集落化しています。

元々、養蚕（カイコ）、ミツマタ、植林で生活してきた集落で、これらが衰退した後は公共土木に依存した建設業と農業で成り立ってきた集落です。専業農家が若干名いるものの、全体としては 40～50 代の若者は建設業、高齢者は農業＋年金で生計を立てて

いるようです。農業は、家庭菜園程度で、隣りの畑に迷惑をかけないために耕作を続けている方が多いようです。

特徴的な取り組み

①直販の取り組み

3年程前から、火曜市を役場前で開催しています。市では、集会所（老人憩いの家）で2～3人が作ったお寿司等を販売する他、10人程が農産物を販売しています。

②ゲートボールを中心としたコミュニティ

集落内には、屋根付きのゲートボール場が整備されており、ほぼ毎日10人以上が利用しています。ゲートボール場は、ゲームだけでなく、おしゃべりの場となっており、お互いの安否確認をはじめとする集落内の情報の循環にある程度役立っているようです。また、ゲートボールがきっかけとなって、町外のチームとの交流も生まれています。

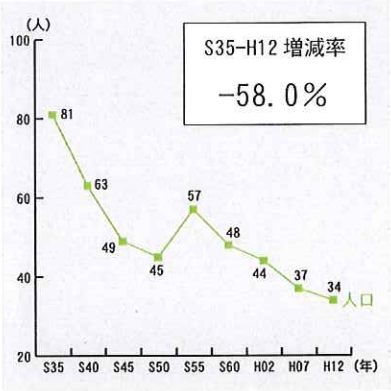
③地元出身者との交流

毎年、「コスモス祭り」として地元出身の地権者（主に高知市在住の高齢者）を集落に招待し、イベントを行っていました。現在は「桜祭り」に変わっていますが、取り組みの内容は変わっていません。地元出身者との交流がUターンのきっかけになればよいのですが、このイベントの場合、あくまで交流がメインで、集落を出ている地権者たちは町外に生活基盤を持っているので、Uターンの可能性は低いとのことです。しかし、取り組みの方針によっては今後、U・Iターンを誘致するっかけづくりになる可能性もあり、集落出身者との交流という面は他集落でも参考になると考えます。

集落の今後・・・

高齢化率が特に高く、今のところU・Iターン者も多くは見込めないことから、今後は、一気に人口が減少していくことが予想されます。

宮ヶ奈路　－miyaganaro－



年次	総戸数	農家数	専業農家数	第１種兼業農家数	第２種兼業農家数	非農家数	経営耕地面積
S45 年	14	14	4	4	6	0	590
S50 年	－	8	3	0	5	0	438
S55 年	13	11	0	0	11	2	387
S60 年	－	12	0	0	12	0	307
H02 年	15	7	0	0	7	8	242
H07 年	－	5	0	0	5	0	152
H12 年	14	8	－	－	－	6	182

（資料：農業集落カード）

集落の概要

宮ヶ奈路は、町役場の北北東、道路距離で約 13.1ｋｍに位置しています。仁淀川支流上八川沿いに走る国道 194 号線の対岸に位置し、橋梁で国道 194 号線と結ばれているため、伊野町、高知市へのアクセスは良好と言えます。

平成 12 年現在の人口は 34 人、人口構成は若年比率 2.9%、生産年齢比率 52.9%、高齢化比率 44.1%と少子高齢化が進行しています。集落の全 34 人のうち働いているのは 12、3 人ですが、農家当たりの耕地面積が比較的狭く、農業だけで生計を立てている人はいません。以前は、高知市まで通勤者が多くいましたが、定年などにより現在は 3 人になっています。定年退職した方の多くは、年金生活を送っています。

宮ヶ奈路は、昭和 40 年頃までは炭焼や桑、コウゾ、ミツマタ等の換金作物を生業としていていましたが、昭和 50 年の台風 5 号によって対岸に大規模な斜面崩壊が起こり、

それを契機として災害復旧工事等の公共事業に依存した集落となりました。集落出身者には災害をきっかけに建設資材会社を設立した方もおり、それによって雇用の場が生まれ、Uターン者も現れています。災害復旧工事以後は、不況対策による土木工事への公共投資や、国体に向けた近隣市町村の整備工事で好景気が続いていましたが、2、3 年前から不況の影響を受け、新たな雇用は望めないのが現状です。

また、他の集落と比較して高知市やその周辺への通勤が比較的容易であったことが、これまでの人口維持に一定は貢献したと考えられます。しかし、その一方で、役場に用事のある時以外は越知町との関係がほとんどないのも事実で、宮ケ奈路は小学校が伊野町の旧出来地小学校（現在は集落内に小学生はいない）、中学校が吾北中学校（旧下八川中学校）の校区となっていることから、伊野町や吾北村との付き合いが多いようです。実際、成人式は伊野町や吾北村へ出席している人もいます。隣の黒瀬とは、氏神様に関して越知町内で唯一交流がありますが、他の集落とはほとんどつながりがない状態です。

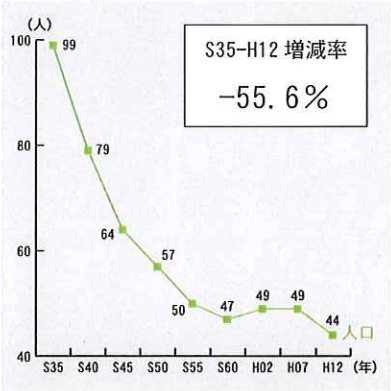
特徴的な取り組み

特にありません。

集落の今後・・・

昭和 50 年以降、公共土木の恩恵を受けて生活を営んできた集落なので、公共事業の削減によって今後人口を維持していくことは、益々困難になると考えられます。また、農業が極めて脆弱であるため、高齢者が生きがいとして行う程度の農業しかできず、現在の産業構造が成り立たなくなった場合、人口の維持は難しいと考えられます。

黒　瀬　－kurose－



年次	総戸数	農家数	専業農家数	第１種兼業農家数	第２種兼業農家数	非農家数	経営耕地面積
S45 年	18	15	4	10	1	3	1,100
S50 年	－	14	4	6	4	0	907
S55 年	14	13	7	1	5	1	784
S60 年	－	10	3	0	7	0	637
H02 年	15	9	4	0	5	6	523
H07 年	－	9	3	3	3	0	518
H12 年	14	9	－	－	－	5	526

（資料：農業集落カード）

集落の概要

黒瀬集落は、町役場から北北東、道路距離で約 10.7ｋｍに位置しています。近年、主要地方道伊野仁淀線の改良が進み、役場までの移動時間は、かなり短縮されてきています。また、国道 194 号線も近く、国道 194 号線までの県道（主要地方道伊野仁淀線）も改良が終了しており、伊野町、高知市へのアクセスも良好です。集落の南側には仁淀川が悠然とながれ、美しい風景をつくり出しています。

平成 12 年現在の人口は 44 人で、人口構成は、若年比率 13.6%、生産年齢比率 47.7%、高齢化比率 38.6%と少子高齢化が進行していますが、町内の他の集落と比べ比較的少子高齢化のスピードは緩やかです。

黒瀬では、畑が水没するなど農地の条件が悪かったこともあり、集落内にある建設会社に依存する形で主に公共土木による建設業で生計を立ててきました。昭和 50 年の災

害をきっかけとして建設会社は成長し、より公共土木依存の傾向が強くなり、農業は自給的なものに留まりました。現在、集落全14戸中5戸は建設業+農業（米、ミカン等）で生計を立てており、現時点でも公共事業への依存度は高いと言えます。

特徴的な取り組み

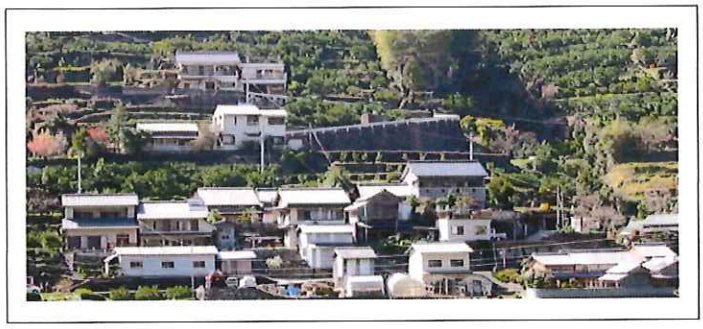
①血縁による集落の団結

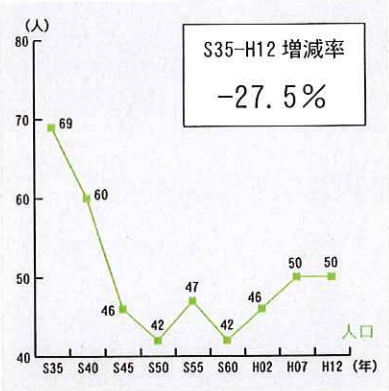
黒瀬の特徴は、住民が全て血縁者で、集落内のまとまりが強いことです。住民は今後も建設業以外でこの集落に雇用の場を作ることは不可能と考えており、集落内の建設会社を支援し盛り上げていこうとする気運があります。

集落の今後･･･

黒瀬では、農業の基盤が弱いため、今後も公共土木に依存しながら生計を立てていくことが予想されますが、公共土木自体の将来への見通しは暗く、この集落では、現状のままでは新たな雇用創出に伴う人口増はほとんど望めないものと考えられます。

浅　尾　－aso－





年次	総戸数	農家数	専業農家数	第１種兼業農家数	第２種兼業農家数	非農家数	経営耕地面積
S45 年	12	11	0	6	5	1	680
S50 年	－	11	0	1	10	0	660
S55 年	15	9	0	2	7	6	556
S60 年	－	8	0	2	6	0	664
H02 年	11	7	0	1	6	4	398
H07 年	－	7	1	1	5	0	400
H12 年	11	7	－	－	－	4	459

（資料：農業集落カード）

集落の概要

浅尾は、町役場から北北西、道路距離で約 5.5ｋｍに位置する集落で、近年、主要地方道伊野仁淀線の改良が進み、役場までの移動時間が飛躍的に短縮されました。集落の北側には仁淀川にかかる沈下橋があり、それを渡った対岸の鎌井田には郵便局、商店があるので集落周辺の利便性は比較的良い状況です。現在の道路ができるまでは、仁淀川の増水により、集落が孤立することもしばしばありましたが、現在はそのようなことはなく、役場周辺をはじめとする市街地までの通勤には非常に便利な集落となっています。

集落の平成 12 年現在の人口は 50 人で、若年比率 28.0%、生産年齢比率 44.0%、高齢化率 28.0%と他集落に比べ若年比率が非常に高くなっています。これは、小～中学生の子供を 1～5 人持つ世帯が 11 世帯中 6 世帯いることが影響しています。40 代までの若い世帯が集落に残っていることの主な要因としては、道路が改良が進み、市街地ま

での移動時間が短くなったことのほかに、現在の区長が 40 代の若い区長で、集落の若者層の意見を取り入れながら住環境の改善を行っていることが少なからず影響していると考えます。

集落の就業状況を見てみると、越知町内に勤めに行っている人が若干名いるほかは、ミカンの加工品や独自ルートでの販売に取り組んでいる専業農家が 1 名いるのみで、あとは年金＋農業の高齢者世帯となっています。年金暮らしの高齢者については、若い時は建設業で、今は農業をしている場合がほとんどです。

全部で 11 戸の集落で、且つ家が密集しており、昔から住民同士の仲が良く、花見や神祭といった集落内の行事が盛んです。それに加えて、市街地への利便性が良くなり、若い区長の存在で若者層が無理なく住める環境が整ってきたことが、他集落に比べ、集落の人口が維持されている要因となっていると考えます。

特徴的な取り組み

① 若い区長の存在

浅尾の現在の区長は 40 代で、区長としては比較的若いといえます。その若い区長がいることで、集落内の若者層は年輩者（高齢者）に気を遣うことなく集落のことについて意見が言えるようになっているようです。また、高齢者においても、区長には一目置いてくれており、区長が若者層の意見を集落の運営に反映しやすい状況となっています。昔からの集落の行事についても、若者の考え方や共働きの世帯のことを考慮しながら、やり方を少し変化させたりしています。

また、区長においては集落規模が小さいことから、集落内の連絡事項は放送で行わず、各戸へ電話で直接行うなど、住民との情報交換をより密にする取り組みを行っています。

② ＰＴＡ活動による住民間の交流

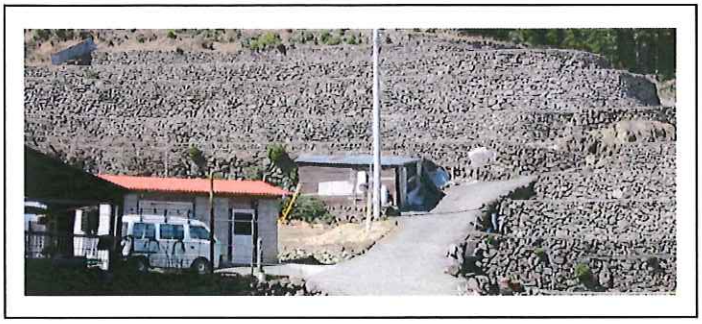
浅尾からは現在、黒石小学校のＰＴＡ役員が 6 名がおり、積極的に学校行事等に参加しています。特に若者層の主婦を中心にＰＴＡ活動による住民間の交流があり、集落内

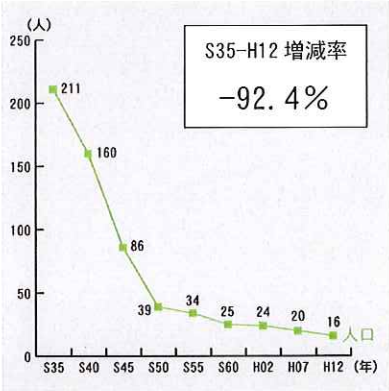
の住民同士のつながりが強くなるきっかけとなっているようです。

集落の今後・・・

道路の改良や集落行事の時代に合わせたスタイルの変化など、若者層が住みやすい環境が整いつつあることや、1戸あたりの子供の数が多いため、今後も集落の人口を一定維持することは可能であるとの判断ができます。

佐之国 －sanokuni－





年次	総戸数	農家数	専業農家数	第１種兼業農家数	第２種兼業農家数	非農家数	経営耕地面積
S45 年	33	29	3	3	23	4	1,010
S50 年	－	18	3	2	13	－	630
S55 年	14	13	0	1	12	1	454
S60 年	－	13	2	2	9	－	368
H02 年	15	10	5	0	5	5	265
H07 年	－	6	2	0	4	－	204
H12 年	11	5	－	－	－	6	166

（資料：農業集落カード）

集落の概要

佐之国は、町役場から北西、道路距離で約 9.5ｋｍに位置しています。小学校や商店、郵便局のある集落までは遠く、決して生活の利便性が高い集落とは言えません。

平成 12 年現在の人口は 16 人で、人口構成は若年比率 0.0%、生産年齢比率 12.5%、高齢化比率 87.5%となっており、現在ある 10 世帯は全てが年金暮らしとなっています。

元々、佐之国は林業と稲作中心の集落でしたが、現金収入の大半は公共土木の仕事によるものでした。公共土木については、昭和 49 年頃に集落まで続く道路工事が行われ、工事の人夫の仕事が現金収入となっていたようです。しかし、工事の終了とともに現金収入がなくなったこと、林業の衰退により次第に人口が減少しました。また、これに伴って、子供の数が減少し、通学路が荒れ、残っていた世帯も子供の通学が心配で集落から出ていったようです。さらに、農業の機械化が進むにつれ、居住地から離れた不便な

場所にあった水田が次々と耕作放棄地となり、農業の基盤も衰退していったことで集落内で生計が立てられなくなり人口流出に拍車がかけられた考えられます。

特徴的な取り組み

① 老後の安住の地としての位置づけ

年金暮らしの高齢者で構成されている集落ですが、基本的には元気な人ばかりで、自分達が楽しく暮らしていくことを生活の基本に据えているようです。移動スーパーや患者バスによって、生活する上で特に不便なことがない上、元気なうちは畑仕事をしながら散歩をしたり、昔からの知人とおしゃべりしたりして楽しく暮らせ、また、お互いに近所のことを気にかけるなど安心感もあるようです。

集落の今後・・・

今後、親の面倒をみるために集落に戻ってくるくる人が出てくる可能性は否定できませんが、このままの状態では、高齢化が進み人口減少が起こってくると、集落自体の存続が難しくなってくることが予想されます。